

健康文化

私の八月十五日

今井田 二三子

昭和二十年八月十五日を私は旧制高山高女の講堂で迎えました。これは後から判ったことですが、敗戦の色濃くなった昭和二十年、広島、長崎は原子爆弾に見舞われ、沖縄は日本本土の盾となって戦場と化し、このままでゆけば次は日本本土が戦場となるのは必定であろうという予測のもとに、若い男子は戦場に赴き、残された老人と女で日本本土を守るため若い女子を戦闘要員として高山で訓練が行われていたのです。その時は、学校から或る訓練を受けるためにY先生（女性）と高山に行くようにと告げられ、八月十二・三日頃であったと思いますが高山へ向かいました。

その頃は軍需工場と化した学校で私達は照明弾につけるパラシュート、防毒マスクを入れる携帯囊、飛行機のカバー等の縫製に当たっていましたのは以前に書きましたが、昭和二十年になりますとそれらの製品は搬出されることも少なくなり、作業場になっている講堂の正面に堆く積み上げられたままになっていましたが私達はそれでもただ黙々と縫い続けていました。

その頃、日頃殆ど病気をしたことの無い私が、頭痛であったのか腹痛であったのかあまりはっきり記憶しておりませんが昼の休み時間に学校近くの校医さんに受診しました。私の父親の年令に近い先生は、私が先生の前に腰掛けるなり突然「日本は負けますよ、必ず負けますよ、あんたはそう思いませんか」私の状態などおかまいなく堰を切ったように話し始められました。

女子学生の私にも先生の誰かに話さなければいけない思い詰められた気持は感じられましたが、その日の朝の学校の訓話で「日本は戦いに必ず勝つ、一致協力して頑張るように」と聴いたばかりで、私の頭の中は混乱と困惑が渦巻き、言葉もなくただK先生の顔を見つめていました。しかしその時から私の心の中に今まではっきりと思わなかった日本は負けるかもしれないという不安が頭を擡げてきたような気がします。しかしその頃は言論の取り締まりが想像を絶する厳しさであったため、この話は絶対に口外してはならないと自分に強く

言い聞かせました。

高山高女の講堂には県内各学校から一名ずつの先生と生徒が合流し、先生と生徒は別々の小隊に別れ、各小隊には高山日赤病院の看護婦さんでしょうか軍服に身を包んだ女の人が配属され、その上に少し年配の女の隊長があり、一人の軍人が全体を統括しておられたような気がします。

最初の訓話は毎日学校で聴く内容とあまり変わらないものでしたが、軍服のせいでしょうか更に迫力のあるのを感じました。後から思えば、その時にはすでに戦争終結の情報が伝わっていたのでしょうか、実戦の訓練はあまりなく、竹槍の使い方の訓練はありましたが手榴弾については説明のみで、投擲の訓練はありませんでした。その場にのぞんで私は果たして手榴弾を使うことができるのだろうかと思いのない思いがしました。また投げる前に誤爆で私自身が吹き飛ばされるかもしれないとも思いました。

板の間に座って長い訓話を聴くことは、校長先生の訓話でなれていましたが、起床から点呼まで約十五分間、食事時間は約十分、水は大切であるから小さい器一杯ですますように言われ、また校舎近くにある水道の蛇口の数は少なく、一時は全員が群がるため、田舎育ちですべてにスローな私は殆ど顔を洗うことができずでした。食事は米、麦、大豆の混じった御飯と味噌汁代わりの薄い塩味のスープでこれは量が少ないため五・六分ですますことができました。

夜は歩哨（入口の番）に立った人もあったと思いますが、私達は体調を悪くして休んでいる人のため約二時間交代で不寝番に立つように言われ、昼間一応通路の下見はしましたが暗闇の中で未知の学校内の行動は方向がわからず、その上足の趾がどこかに当たりやっとの思いで休養室にたどりつき足の痛みには堪えながらベッドの脇に立ったのを思い出します。一本のマッチの燃え尽きる間に時間をみて次の当番を起こされる小隊長を脇目で見ると一体この人達は何時眠られるのだろうかと思いに思いました。その不寝番も二回目は回ってきませんでした。何故なら翌日に八月十五日を迎えたのです。その日は何の訓練もなく短い訓話のみで、正午に重大な放送があると告げられました。

それが終戦の詔勅でしたが、ラヂオの音声が悪く私は全く聴きとることができず、周囲の啜り泣きを耳にしながら戸惑った思いをしていました。後から誰からともなく戦争が終わったと聞かされたときも校医のK先生の言葉が心の何処かに残っていたのか大きな衝撃は受けませんでした。ただ戦闘要員として訓練を受けている私達はどうなるのだろうか、家ではどうしているのだろうか、

アメリカの軍隊が日本に上陸してきたとき私達はどうなるのだろうかという不安が頭の中に広がってきました。私語を禁じられることもなくなりましたが私達はあまり語ることもなく講堂の中は相変わらず重い空気に包まれていたように思います。その二日後、私達は現地解散が告げられ、私はY先生と帰路の車中の人となりましたが、岐阜に向かう汽車の窓外には水稻の緑、山々の緑が何事もなかったかのように静かに続いているのを目にして、今までの不安が少しずつ薄らいでゆくのを感じました。

家の敷居をまたいで、出迎えてくれた野良着姿の母を見て、また当時は兄が元気でいた安心感もあってか「まあ何が起きてもいいさ」といった開き直った気持ちになってきました。

夜になり連日の警戒警報、空襲警報のため電灯の周囲を黒い布で包み、光が戸外に洩れないように夕方早く雨戸を閉めて、電灯の下だけの僅かな明かりで仕事をしていたのが、雨戸を閉めることもなく、煌々と電灯をともすことができたのが無上に嬉しかったのを覚えています。

四才で亡くなった弟が暗闇を嫌い「空襲警報をことわってきてー」と叫んでいたのを思い出しました。

電灯を灯しながら「定男がいたら喜んだらうに」という母のつぶやきを耳にして母娘は同じようなことを思うものだと感じました。八月十五日になりますと、日頃忘れていた高山の数日、校医のK先生の言葉、それに母のつぶやきを決まったように思い出します。

(内科開業医)